

ベルネリを通してのユートピアの旅

評書

マリイ・L・ベルネリ著『ユートピアの思想史』

縫田清二

ベルネリの「ユートピアの思想史」は私にとても思い出の深い書物の一つである。本書の出版は一九五〇年だが、私がこれを求めたのは一九五三年六月二十九日、当時の値段で八八〇円だった。一九五三年、すなわち昭和二十八年といえ、アイゼンハワーが米大統領に就任し、スターリンが死亡し、英女王エリザベス二世の戴冠式があり、国内生活ではNHKがテレビの本放送を開始し、公衆電話が五円から二〇円になったころである。

そのちょうど七年ほど前からユートピア思想の比較研究ということを生涯のテーマにきめて、とほととそういふ勉強の生活を歩み出していた私は、当時、まったく孤独な研究者だった。それまでの日本の学問のあり方に

たいする批判や反省はあらゆるところでなされてきたので、なにかしらあわてて生まれ、なにかしらあわてて生活し、なにかしらあわてて死んでゆくわれわれ日本人の学問的雰囲気はあいも変らぬ状況だった。そんな環境で「ユートピア」などという「むだごと」論議を本気で相手にしてくれる人間は、ほんの二、三人を除いては、まずほとんどなかった。そんなとき、ベルネリの本書に出会ったのである。

遠来の友に邂逅したかのように心躍る思いで本書を手にしたのだが、まずジャケットの略歴で彼女が若くしてすでに死亡していることを知り、なにかしらい知れぬショックを受けたのを今もまざまざと思い出す。

ところで、本書を一瞥した限りでは、あまり感動することもなかった。つまり、ごく通俗的なユートピア作品を年代順に配列し、しかも大部分がアンソロジーから構成されているという軽卒な直観をもったからである。だが、少し読み進むにつれ、著者の明哲な方法論を繊細な人間の感覚でやんわりと包みながら、まことに用意周到な注意力をもって配列されていることが、その行間から滲み出るみずみずしい知性を通じてこちらにも脈々と伝わってくるのに気がついて、あらためて著者の真摯な研究態度に敬意を表したものだ。

私が本書でとくに評価したい点は、これまでの世界の学問体系の対象としてはほとんど顧られなかった「ユートピア」思想というテーマにたいして、著者がきわめて正統的な態度で真正面から取り組もうとしている先駆的な意義と、その模索過程の底に一貫して流れている著者自身のイムバーシャルな研究態度である。

ところで、ユートピア研究にたいする「正

統的な態度」とはいったい何を意味するのだろうか？ この点、著者自身が「わたくしは、概して正統的な方針にしたがってユートピアを選んできたが……」（五一―八ページ）と自ら言っている点は注目に価する。すなわち、いかなる種類のユートピアとて真空のなかで醸成されたものは一つもなく、常に現実の社会思想の一つとしてその土壌の上に開花しているのである。したがって、ユートピア研究にたいする正統的な態度というのは、いつの場合にも、（よしそれが文学作品であろうと、いやしくもユートピア思想史の一環として把握する限り）、人類の社会思想史の巨視的透察と、その社会科学的分析をもっているか否かの点にある。

ベルネリはむろん社会思想的な分析力をもつて人類のユートピア思想に対面している。が、その分析視角の特徴は、人類のユートピア思想を、権威主義的ユートピアと、これに対立する自由な共同体連合としてのユートピアという二つのパターンに分類していることである。従来、多くの研究では、ユートピアはすべてユートピアとして一括して思考対象の組上にのせられてきたが、同じユートピアでも冷静に分析してみると、そこには異質の

構成分子があることを明確に分析、抽出したことはベルネリの大きな学問的貢献である。いかなる場合にも、とくに「思想」というものを感覚でのみ捕えようとする者は広々にして致命的な陥穽におちいる。「社会主義」という言葉だけを確信するならば、そこには「国民社会主義」National-socialismus というものもあるし、「共同体」という言葉だけに眩惑されていると、そこにはファシスト共同体（ムツソリーニは『資本主義から共同体国家へ』という書物まで書いている）というものもある。

この点、ユートピアにしても、ベルネリは、けっして一様には見ていない。たとえば本書の冒頭で扱うプラトンの『国家』など、著者によれば権威主義的ユートピアの筆頭にすえられる。が、このような分析は、とくに著者の分析の徹底さを証明するほどのことはない。むしろ、取り上げる視角は異なるが、この点でならシュンペーターの方がより一層シャープであろう。すなわち、シュンペーターはつぎのように言っている——「どうしてもわれわれのつくった上衣のなかに彼（『プラトン』）をほめこまねば承知しないというならば、彼には共産主義者たる上衣よりも、むしろファ

シストたる上衣の方が、まだ似合っているように思われる。けだしプラトンの〈国家構造〉は、最上級の水準の最も純粋なアイデアを除いては、私有財産はこれを排除していないが、その半面たとえば個人の富の制限や言論の自由に対する嚴重な制限をも含めて、個人生活の厳格な規制はこれを強行しており、さらにまた、それは本質的には〈組合国家的〉なものであり、統率階級の必要を認めているが、これらはいずれもファシズムを規定するのにならなく役立つ特徴たるを失わないからである。』（『経済分析の歴史』1。一〇六―一〇七ページ）。

いずれにせよ、このような著者の「正統的」な研究態度と並行して本書を特色づけるもう一つのイムバーシャルな研究態度というのは、たとえばマルクス主義にたいする明晰で自由な評価などによくあらわれている。

ベルネリは、エンゲルスのユートピアに関するあの有名な基本命題（「ユートピアより科学へ社会主義の発展」）にたいして、「エンゲルスの社会主義的ユートピアにかなする論述はだいたいにおいて正しい」（三四九―三五一）としながらも、「しかしエンゲルスは、〈ユートピア的〉企画は〈科学的〉社会主義

者のそれよりも非現実的であるときみなした点では正当でなかった」(三五〇ページ)と批判することを忘れず、その論拠を冷静に述べているところなどはまことに説得力がある。



私は以上のような視点から本書の意義を評価するものである。が、とくに著者のユートピアに関する「二つの分類」については、方法論には同感し得ても、その論理性についてはもの足りなく思う。つまり、あまりに平面的なのである。また、些細なことかもしれないが、著者がかなり厳密な態度で文献を扱っているからこそあえて言うのだが、原典の取り扱いはもう少し慎重であってほしい。たとえばガブリエル・ド・フォアニーの『ジェームズ・サドゥルの冒険』(訳書五二二ページ、原書三二二ページ)などは明らかに『ジャック・サドゥルの冒険』の間違いであろう。訳書三一ページ以下(原書一八四ページ以下)のフォアニーの箇処では『ジャック・サドゥルの冒険』になっており、これが正しい。また、ドニ・ウエイラスの『セヴァリテスの歴史』(訳書二九七ページ以下、原書一七

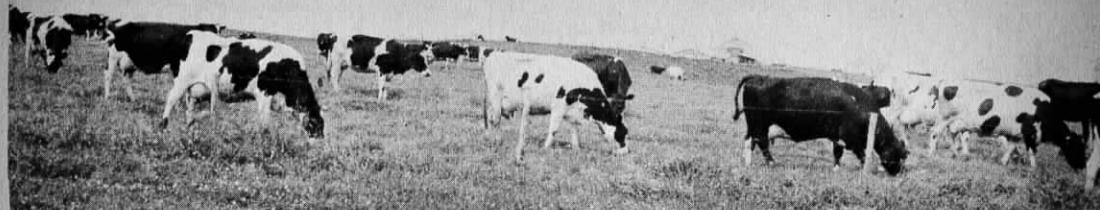
五ページ以下)にしても、たしかに英語版では『The history of the Sevares or Sevarambis...』という表題になっているが、仏語版では『Histoire des Sevarambes...』であり、ユートピア思想のジャンルではフランスのユートピアの一つなのであるから『セヴァラン人物語』とした方が正統ではないかと考える。ただ本書は、フランスのユートピアでありながら最初に英語版が出版され(一六七五年)、仏語版(一六七七年)は二年後に出版されるという奇妙な出版事情をもつユートピアなのである。誌面がないから、その事情については省略する。

最後に訳本についての感想だが、『ユートピアの思想史——ユートピア志向の歴史的研究』という日本語の表題にはいささか抵抗を感じる。周知のとおり本書の原題は『Journey through Utopia』というつましやかなものであり、それだからこそ、著者のあのよう自由闊達で軽ろやかな筆致が許されるので、これを『ユートピアの思想史』というようにいかつく構えることは、それこそ著者の最も憎悪する「権威主義」的なものに堕してしまいうし、これでは著者の心情を傷つけることになろう。また、もし、本当の意味で『ユート

ピアの思想史』として発表するのなら、たとえ著者がユニークな手法で研究対象を取捨選択するにせよ、あれだけのユートピアしか対象にしないのは、その表題にたいしてあまりにも貧弱な研究と言わざるを得なくなる。おそらく、出版社の営業政策上からの配慮かとも想像されるが、ともかく、とくに訳書の場合には、原著者の心情を尊重することがすべてに優先されないと、とんでもないことで世間を欺くことになりかねない。

またもう一つ、最後の「参考文献」の項で、日本語訳のあるものはそれを列挙しているのは読者の便利のためにいい。が、それならばもう少し親切に、訳書のあるものはすべて挙げるべきである。ホップスやスイフトなどは訳書も多く、また周知のものだから省略されたのだろうし、それでもよいが、シラノ・ド・ベルジュラック、モレリー、ヴォルテール、フリーエ、サン・シモン、オーエン、ハワード、アナトール・フランスのユートピア諸作品は日本語訳があるのだから、当然に列挙すべきであると私は思う。

(手塚宏一・広河隆一訳、大平出版社、一九七二年五月刊、五五四ページ、二〇〇〇円)



素晴らしい協同体社会を見る ヤマギシズム北海道試験場

(上の写真は北試の放牧地)

手塚 信吉

一、真理に生きる人々

いまから十年前前である。わずかの家財と当座の生活費を持って、ヤマギシズム同人六名が北辺の地、別海村バイロットファームに入殖した当時は、共同化を異端扱いされ、監督官庁からも農協からも警戒されて、さんざん苦難をなめさせられた。

それでもようやく昭和三十八年にはオーストラリア産ジャージー種の乳牛が輸入され、その割当頭数七十頭を全部借入金で受入れるまでになった。ところがその乳牛がブルセラ病の保菌牛で、全道的に大打撃を受け大さわざとなった。ヤマギシズム試験場でも二十八頭が次々と発病して屠殺され、結局は残る四十二頭も副業の養鶏一五〇〇羽までも全部焼却処分となってしまった。

これではもはやだれの目にも再起不可能であり、夜逃げをするのも時間の問題であろうと、もっぱらの噂であった。旧式の梱包機一台を頼りに、牧草の梱包販売により一同露命をつないでいた。そんな昭和四十年八月、私は北海道教育大学教授、草刈善造先生と同行して同試験場を訪れたのであった。

一泊して夕食後、当時は珍しかったイス

ラエルのキアツとヤマギシズムとの共通点などを中心話題として、一夜を徹して語り合ったが、集まった人は男女あわせて二十名ぐらいであった。いまでも強く印象に残っているのは、受難と貧困のどん底にありながら、不安感も焦燥感もなく、自信に満ちた瞳の輝きを感じたことであった。

この乳牛飼育の失敗を聴いて、私はすぐイスラエルのキアツ・キリヤットアナビームのことを思い出し、勇気付けに役立つと考え、こんな話をした記憶がある。

もともとパレスチナ地方には羊はたくさんいたが牛は一頭もいなかった。牛乳を常用するユタヤ人はなんとかして乳牛飼育に成功したいと、世界各国から種牛を輸入してみたがことごとく失敗に終わった。どんなに注意してみても、結核と流産症におかされて失敗してしまつた。それを二十余年を費して研究に研究を重ねて、ついに発見したのがダツチカワ工種の乳牛をカナダにおいて数代育成した子孫牛を輸入して、ようやく酪農事業を完成した。これが今日の盛況となったものと言ふ。

砂漠開拓の努力を思うと、根釧原野の開拓農業は比較にならぬほど有利です。おおいに頑



張って下さいと激励したのであった。

最大の危機に直面したのはその年の越冬であったという。空腹に耐えながらヤマギシズム精神の寄りどころである研鑽に研鑽を重ねた結果、男十二名は芦別炭坑の臨時夫として入鉱し、女たちは家政婦となって都市に働き、残った女たちが留守を守って子供たちの面倒をみて、一致団結して苦難を突破したという。当時の北海道新聞は、三面トップ記事で大きくそれを報道していた。その年の九月中旬であつた。私は駐日イヌラエル大使シユネルン氏を案内して、北海道庁のあつせんにより

全道的にキブツ講演会を開催、札幌、旭川、釧路を経てヤマギシズム試験場に立寄つたのであつたが、牧草採取と梱包販売のみであり、四十数名の生活を支えるのは容易ではなかつたらしい。

それからも噂は常に耳に入っていたが、丸五年振り昭和四十五年八月八日の第二回収穫祭に招待されて、例によって北上、函館、札幌、旭川とキブツ講演を兼ねて出席した。当時の隆盛ぶりは「月刊キブツ」にも書かれてあるが、今度は面目一新、容相一変、牛舎も建ち、丸々肥ったホルスタイン種の乳牛二八〇頭、うち搾乳牛一八〇頭、年間生産高五千万円、根室管内一の規模を示していた。そして第四回収穫祭が去る八月八日開催され、二年ぶりで訪れてみると、立派な食堂や集会所もできており、牛舎も増設されて搾乳牛三〇〇頭、育成牛一三〇頭、年間乳量七二トンという大牧場にのしあがり、その規模、乳量、品質ともに根室管内第一位。自他ともに許す協同一体化の勝利を誇っていた。

当牧場年中行事の収穫祭も年とともにさかんになり、全国から集まる青年男女百余名、それに近郊の農民数百人。広い牧野を埋める乗用車幾百台、一望千里の広野を照らす大か

がり火を中心に、夜を徹した乱舞の中に新しい時代の息吹を感じるものがある。特筆に価するものは、全国の若者たちを強く引きつける、不思議な吸引力そのものである。石の上にも三年というが、それが農業では十年かかる。わずかに六名のヤマギシズム同人が最初に入殖して、苦節十年の歳月が流れた人もかわつた。人数も急増した。その間落伍者も数を知らない。だが北試（ヤマギシズム）

（近代農機がとり入れられている）



北海道試験場）は日本農村では見ることできない知識青年が集まり、活気にあふれ、意気盛んで、理想の夢が着実に現実化していく。そこには計り知れない未来の夢が待っている。

二、北試の七不思議がわかれば日本農業がわかる

一、入殖以来あれほど当局からは危険視され、阻害され、地方人からは軽視されながら歩み、一歩と確実に発展し、注目され重視されてきた。

二、高賃金でも人不足に困る今日このごろ、知識と労働力兼備の優秀青年が雲集してただで働く北試とは。

三、根釧原野内の牧場経営にも共同化した牧場はたくさんあるが、ほとんど独走的に発展している北試の因子は何か。

四、共同牧場の牛乳は乳質が不同で劣悪というのが常識であるが、北試のそれは根室管内で連続五年最優良品である。

五、乳牛飼育頭数の増加に比例して一頭当りの乳量減少が常識であるが、北試は根室管内第一の多頭飼育であるが、一頭当りの乳量も第一位である。

六、北試では毎月一回一週間の特講、「特別

講習研鑽会」を催し、その共鳴者が参加するので、人生観の一致から紛争がない。

七、現在北試の同人は老若男女あわせて百名程度であるが、直接民主主義ヤマギシズム研鑽方式により、全員一致の賛成を求めて一切を運営している。

一泊二日の観察では内容を把握することなど無理な話であるが、なぜかこの協同体社会には新時代的なものを感じ、日本の他の協同

信 風 保育所づくり

「桃太郎ハウス」（注一開かれた家）などといキがってやり出したのですが、中途半端故に手ひどいパンチを食ひ、一応止めようと思つています。そして来月より、ウーマンリブの連中と一緒に保育所をやる予定です。来る人は清潔にして、泊るなら一日に二〇〇円を出し、お客さん根性を捨てて食事作り、片付け、掃除、洗濯及び乳幼児の世話を「自分の問題」としてやってゆこうという人のみを紹介して下さい。

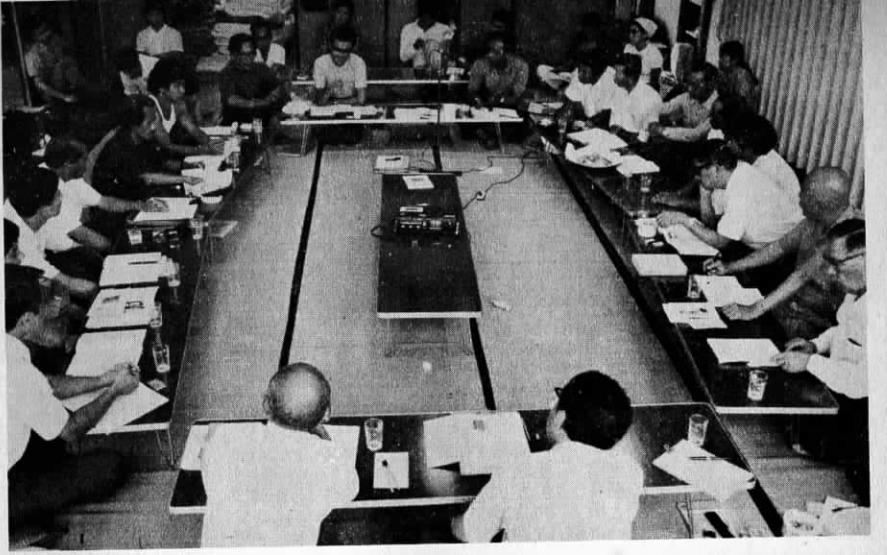
（京都市左京区 野村耕治）

備北の近況

八月は毎日のようにいろんな人たちが訪ねてきてくれました。現在は、中山仲生さんをはじめ「キブツ」の読者の人など四人でやっています。三つのクリ園と一つの牧場とわが方の五つの仕事があつて、追いまくられている感じです。

クリも収穫がはじまり、ますます忙しくなっています。この秋から来春までは、シイタケの原木を無料でいただいたので、一町歩ばかりの山の木を切り出すことになりました。ヒヨコも元気で育っています。

（岡山県備北開拓 今井真治）



第5回共同体話合いの会報告

合流する地下水

8月26・27・28日 新しき村(埼玉)

制作部(百瀬)

参加者

- 新しき村
渡辺貫二 朝日靖夫
他多数
- 山岸会
服部一馬 榎並春義
今西民太郎
- 一燈園
原川義雄
- 大倭紫陽花邑
飯河四郎
- 東山産業
志渡勇一 藤井章作
- 厚木振出塾
原康男
- 光南農場
岡崎周
- 河内共同養鶏実頭農場
木村弘
- 日光協同養鶏場
大森隆雄
- ぐるーぶ・もぐら
土竜実 菅田恵子
大塚卿之 増田正雄
- まみず会
野村邦男
- 研究者
山根常男 縫田清二
見田宗介 見田暎子
- 世話係(日本協同体協会)
手塚信吉 百瀬直彦
岸田哲

一昨年の夏、「日本の共同体話合ってみる会」という名称で日本各地の共同体のメンバーが奈良の心境農産に集まったのが、この会合の発端でした。二回目からは「日本の共同体話合いの会」と名称を変えて、東山産業(第二回)、一燈園(第三回)、山岸会春日(第四回)と会合を重ねてきました。(過去四回の報告は、それぞれ「月刊キブツ」70年10月号、71年2月号、71年9月号、72年2月号の誌上に載っていますからご参照下さい。)

今回、第五回目は初めて東日本に会場を移し、埼玉県毛呂山町の「新しき村」で、去る8月26日から28日、前回までの参加団体数、参加人数をはるかにしのぐ大きな規模でおこなわれました。

世界的傾向として、社会が肥大化、無機化するにともない、「共同体」が再び各方面からとりあげられることが多くなっています。社会一般の人々が注目するより何十年も早くからコツコツと努めてきたこれら参加団体、

参加者の実践のなまの声に接するのは、実に誰かが感想で述べたように「同時代に生まれたいあわせ」であったと思います。と同時に「ぐるーぶ・もぐら」、新しき村の若者たち、東山産業の藤井君、「まみず会」など、これ

からの実践をになおうとする若い人びともまじって話合った今度の会合からは、特に興味ある真相がもたらされたようです。

若い共同生活体である「ぐるーぶ・もぐら」が「台風の目」であったことは事実でした。ベテランたちも、若者たちの運動のあることを知ってはいました。しかし、自分たちとは

新しき村について

「新しき村が今もあるんだって?」とびっくりする人も多くいます。学校時代などを通じていちどはこの村の名前を耳にした人は多いが、どんな風にして始められ、日向から埼玉に移り、今五〇何人かの住人をもって独特な村となっているかを理解している人は決して多くはありません。あまりにも村の文学的芸術的精神だけが伝えられて他の面が見落されているようです。

(1) はじまり

武者小路実篤氏を中心にして、大正7年同志が集まり、雑誌「新しき村」を発刊、実際

の土地探しに入る。講演会などおこなわせての土地探しの結果、宮崎県の本城村に話がましまり入殖。「最初の一年は建築が主な仕事で、母屋三十五坪は一里以上の山道を実篤始め材木をかついて運んだ。土地の人達は皆の働くのに驚いたという。以後建築の仕事はずっと続いた」(新しき村年表「この道」昭和四六年11月号)

第一年目は19人、第二年目は40人前後が生活したが、第十一年目(昭和3年)からむこう十年間に入殖地が県営ダムのため縮小されたためもあって、在住者は22人に減少しました。日向の地ではやってゆけないため、埼玉県に土地を選定し、昭和14年から入殖、開拓

を開始しました。

この初期の「新しき村運動」は、はじめた者たちに社会改革運動などの特別な意志が稀薄だったにもかかわらず、当時の社会一般にとって「ひとつの社会的衝撃」であり、警察にさえも眼をつけられていたそうです。参加した者たちには熱気があり、あと十年もしたら「日本中が新しき村になってしまおう」と信じられていたほどでした。

(2) そのい

戦中から戦後にかけて、村は最悪の時を迎えました。働ける人はみな兵隊にとられ、はなはだしい時は「カマも、クワもなく、収穫物をしぼる縄もなく、みんな近所の農家から借りなければならなかった」。

実篤氏は早くから居を東京に移し、文筆に専念、外から村を支援することになっていました。「村は5年や10年ではできない。少なくとも生きている間は村はつぶさない」方針が変わってきたといわれます。この苦しい時期を一年また一年としのいでこれたのも、実篤氏の「口は出さないが金は出す」方針によるところが大きかったとのこと。村の経済的

自立がやっと果たされたいま、ふりかえると「武者先生の家に降りる坂を下りながら、金の足りないことをどうやって切り出そうかと苦しんだころのことが思い出される」と現在の村の最古参である渡辺さんは述懐していました。

(3) 現状

昭和42年新しき村は50周年記念を盛大に祝いました。記念碑が実篤氏の手で書かれました。「心愛に満つる時 花咲く 天を讚美す 喜びの使い 来らずということなし」この石碑が村の入口、右手の芝生の中に建っています。左手の桃畑、茶畑を越えてなお行くと、公会堂があり、そこは台所のついた共同食堂、

舞台、風呂場、トイレなどがそなわり、冷暖房装置のついたものです。今回の会合はその舞台上を使って行なわれました。

経済的にも養鶏の比重が飛躍的に増大し、最近2万羽余の収容能力をもつ成鶏鶏舎が完成しました。他に水稲、桃、梅、茶、栗、牛乳、自家野菜などの生産態勢を持ち、数年前から外部に頼らずに自活できるようになったそうです。「五〇周年には五〇人ぐらいと思っていたが、これからは土地も拡げて百人ぐらいが生活できるようにしたい。そのためにもぜひやりたいのは、印刷所経営、陶器づくりであり、着々と準備も進めている」と渡辺さんは今後の抱負をのべていました。

なお、日向の村にも現在杉山さん家族他が住んで充実をはかっているとのことでした。

新参加者

過去四回の会合に参加してきた一燈園、山岸会、大倭紫陽花邑、東山産業、厚木振出塾などについては、すでに何回も紹介されているので、ここでは新しく参加してきた団体、参加者について簡単に記しておきます。

河内共同養鶏実顕農場は昭和三八年にはじまった養鶏を主体とする農場で、最近結成された全国協業経営体連合会のメンバーでもある。最近、大学院で農業を勉強した若者などが三人入ったり、消費者運動と直結して有

精卵を健康食品として供給するルートを開拓したりして活発に動いているとのことでした。この農場からは、木村弘さんが出席して、熱心に話合いに耳を傾けていました。

10人前後の若者たちが東京都府中市で共同生活しているのが、ぐるーぶ・もぐらです。「月刊キブツ」七二年6月号参照）みんな外で働き、ひとつの釜、ひとつ財布でやっています。一緒に生活しはじめてから、一年と少しがたちました。その間多少の出入りはあったものの、もぐらに来たら必ず一緒に働いてもらうことになっているので、比較的安定していて、外部のもののために自分達の生活をめっちゃめっちゃにされることはあまりないといふことです。しかし問題は、ある程度満足できなくもない今の東京での生活から、どう一歩を進めるかです。ここからは、土竜実君、菅田恵子さんが参加。

栃木県今市市の日光協同養鶏場から、河内の木村さんに「引っぱられて」参加したという大森隆雄さんは、このような会合は初めてのことと、「ずい分と刺激になった。井の中のかわずではだめだと思った」と素直な感想を述べていました。

光南農場は、その前身を光の村といい、農

業青年修練道場でした。新しき村、一燈園などの思想からも影響を受けて、農村の物心両面の荒廃を憂え、楽しみながら農業する場として伊東に創設されたものです。その後、ミカン、養鶏など、いわゆる「果樹牧畜農業」を基本として、形こそ変われ、ミカン5ヘクタール、鶏516万羽を、探求のひとつの手段として全部手、半分機械、全部機械の三つのシステムに分けたりして研究しているそうです。あいにく参加者の岡崎周さんは二日目に用事のため帰ってしまい、それ以上に詳しい話を聞くことができず残念でした。

この会合で少し毛色の違っていた参加団体はまみず会でした。この会は世界平和の達成を具体的な、実現可能な方法で着実にすすめていこうという集まりで、会員数約一五〇〇名、「月刊まみず」を柏樹社から発行しています。まみず会の中にいくつかの研究サークルがあり、教育、国家エゴイズムの超克などの問題の具体的な解決法の研究と実践を重ねているユニークなグループです。根拠地論的な共同体志向を持っているとのこと。これら実践団体とは別に、三人の研究者の方々にも参加してもらいました。山根常男さんはすでに三回目の参加ですが、縫田清二さん、見田宗介さんは初参加です。各研究者の研究テーマは違っていますが、人間解放をめざす共同体の運動に深い関心を寄せていることでは共通しています。こうした会合を通して研究者と実践者との間に交流がおこなわれることは、両者にとって意義深いことと思えます。また、見田さんの奥さんは、「自分で子供を産んで育ててみて、共同体の中の女の役割、子供の育て方、親子関係のあり方に、ひとことならぬ興味を持った」とのことと、二人の子供をつれて参加したのが異色でした。

環境保全と共同体

今回の会合の進め方は前回までと違って、新しき村の見学と各参加者の自己紹介をおこなったあとは、何人かの常連の参加者による

報告と問題提起を中心にして話合うという方法をとりました。渡辺貫二さんが新しき村について報告してくれたあと、最初に「環境保

全と共同体」というテーマで次のように話してくれたのは一燈園の原川義雄さんです。

「最近一燈園を訪れる外国人が多くになりました。その中に国連世界環境会議の帰りに立寄った学者、国際心理学会に出席するために来日した学者夫妻などがおります。かれらは一様に一燈園内部の樹木、岩石、小動物、小鳥たちが少しも荒らされておらず、実になごやかに住人たち、家屋と調和を保っているのに、おどろきの声をあげています。くも一匹も大いばり朝の光に輝く糸を樹の間に張りめぐらしておるといふ次第です。鳥の数は七十数種類の多きに及んでいます。」

近頃一燈園のまわり、特に滋賀県側は家屋建造の規制がないので、丘をけずり、木を切り倒しての宅地造成が進行しています。そんな中において、一燈園はがっちり中間に入つて城砦となっております。これは新しき村にしろ、春日にしろ、大倭にしろ同じことでしょう。新しき村などの場合は、四方から宅地化の波が押し寄せている中で、樹木の間には梅を植え、茶畑を作り、村がなかったならつくりにブルドーザーで崩されてしまったような緑の砦を、別に固守するでもなく守つて下さ

っています。実にありがたいことです。

一燈園の場合、なぜ他の人がびくつきするほどによく自然が保たれているかと申しますと、それは一言でいって、主義主張より簡素な実践生活のおかげです。天香さんは闘争的経済生活に大きな疑問をもった人でした。どうやって他人を傷つけずに生きてゆか迷いに迷い、解決のつくまで飯は食うまいと決意の断食に入り、その三日目、突然赤ん坊の泣き声が聞こえて参りました。ああ、おなかかすいているんだなと思つてなお耳をすましておられますと、はたと泣きやんだ。天香さんの頭の中には母親の乳房にかぶりついて夢中で乳を飲む満足気な赤ん坊の顔、そして乳房を与えて満足気な母親の顔が浮かんで参りました。これだ。これこそ経済生活の理想だと、天香さんははたと気づいたのでした。

与えて喜び、もらつて喜ぶ、これ以外のことは結局不要になる。誰の邪魔にもならない道のはしっこ(路頭)に立ち、仕事させてくれるところへはどこにも行き、食わせてくれる、くれないにかかわらず一心に仕事する。今の一燈園もとはといえはすべてここから始まつております。後年、一燈園のメンバーは何人かと問われると、天香さんはいつても、

「たつたひとり」とお答えしておりました。そのうちあずかりものが多くなりました。山科の今の場所もそのひとつです。あずかりものですから、その場所を汚すまい、壊すまい、いつでもお返しして恥ずかしい状態にしておくと心配りが生じて参ります。

天香さんは「起きて半畳、寝て一畳」と常に申され、夫婦の住いも三畳でこと足りるとして実践されておいででした。しかも、これらの住いも京都などの知友からあずかり、分解して山科の地に持って来たものです。常にムダのないよう心掛けていますので、自然ゴミも少なく、掃除もゆきとどいております。人間の数は多くとも、自然必要な建物の面積は少なくなり、緑に囲まれて静かに暮らさしてもよろうております。

人間の幸福を図式的に考えて、たとえば欲望を分数の分母として、その充足を分子として表わしますと、現代社会では物質的欲望が果てしなく増大してゆき、充足がそれに追いつかないのでなかなか満足することがございませぬ。天香さんは逆に、分母をゼロに近づけたらどうやと申されるのです。するとその幸福は計り知れないものがございます。現今よく耳にすることは、環境保全にせよ、福祉

社会にせよ、経済の成長をある時点でストップさせねばならないというております。しかし、これとても各人に欲望の制御がでなかつたら不可能なことでありまして、それは自覚的な共同体が各地におこり、砦をひとつひとつ確保していつて下さる外に道はない。環境保全は共同体でなくてはだめだ。こう思つております。」

原川さんの話にみなそうだ、そうだと大きくうなづいていました。渡辺さんは、「村ももともと貧乏ですから、一燈園さんと同じように、どちらかといえば必要最少限なものだけあれば他のことは意に介さないところがあつた。それが良いところでもあれば、自活に五〇年もかかった理由でもあります。今でも経済的なことにはまったく無関心で、自分のことに夢中になっている人が大部分です。ほくら、個人の完成ということを第一に考えるから、それも仕方ないだろうと思つてますが。」と言います。山岸会の榎並さんは、「環境を汚染から守るためとか、自分たちだけが健康な暮しするためとかいうて、環境保全できる共同体作ろうやないかいという人たちがいるけど、それは違う思います。共同体、あるいは

私ら一体生活していますけどそれがもう自然とか他人とかの一体、調和をふくんでいと思つてうんです」と指摘しました。同じく山岸会の服部さんは、「人間の考え方自体が公害ではないか」と鋭く問題の核心に迫ろうとしました。

これから自分たちの農場を持ちたいというもぐらの土竜君は、「自分たちのあり方というか、発生の過程はここに居る人びとの共同体の発生とはよほど違う」ことを前提として、「それなら公害都市の真中に住まざるをえない人たち、その中で反公害闘争、その他もろもろの不条理と闘っている人たちと、どのような形でつながっていったらよいか」と問いかけてました。「共同体」を作ることには「逃避」だとする世間の一部からうける批判を自らの「痛み」とするところから出た問だったのでしょうか。新しき村の渡辺さんは、「ほくらはいこうして微力ながらやっているんだ。そうしたら人たちはかけ声ばかりかけていて実は自分では「時がくるまでは」何も実現できないという。もし今やらなかつたら、その時はいつまでたつても来やしない」と答えました。

「しかし、共同体さえ作ればすべて解決するわけではないでしょう」と土竜君。「それは

やっているほうが一番よく知っている。しかしやっぱりそのことをやりつづけるしかないんだ。身体はひとつしかないし、何かひとつだけでもやりお世話たら、その人の一生は大成功だといつてもいい。」と渡辺さんはがんばる。……

というわけで、問題は世代論にまで飛び火しそうになりました。それは常に問題になることで、実際のギャップはそう簡単には埋まらないのですが、そこにこそ交流の大切さがあるようです。

東山産業の志渡さんは若者の心をとらえる人で、放浪の末に東山産業に落ちつく若者も多いと聞きます。「結局、若いもんの思う通り、やりたい通りやらせるのが一番良いようですわ。我われには及びもつかぬことをやって、我われを乗り越えてゆくのはかれらですから。」と言う。また、厚木振出塾で連日出入りの激しい若者たちと一緒に生活している原さんは、「若いもんはあせりよるですね。戦争だ、公害だゆうて。その問題の根本は人と人のつながりが間違うとるんやから、しばらくすわつてそこんところを考えてみんか、いうんですが、やっぱり水俣だべトナムだいうとどび出して行きます。ほんで自分の未熟

を思い知らされてすごすごまた帰って来よります。」と言う。大俣の「交流の家」でワークキャンプの若者たちと語り明かすこともしはしばどい飯河さんは、「いやあ、若者は純真ですからね。おとなたちの過去の傷口に何の心も加えずさわつてくるんです。またその逆におとなたちも経験をたてにいつて、若者の反発を招くんです。」と説明する。いず

変遷のプロセス

東山産業は幾多の変遷を経てきたユニークな、経済的にも成功している共同体のひとつでしょう。「共同体内の人間関係にはどうどろしたのも含まれる」との指摘を受けて立つ形で志渡さんに東山産業のどろくささをつぶさに話してもらいました。

まず志渡さんは「共同体の経済の問題は、内部のひととの問題にくらべたら、とるに足らない問題ともいえる。」と切り出す。それよりも志渡さんが長く苦しんで来たのは、実際に共同生活、労働、炊事しながらもおたがいに離反せざるをえなかった、人間の心の不可解さでした。そこには、河内の木村さんも言

れにせよ、世代の問題はこれからの大切な話題になりそうです。

環境保全の問題と関連して欲望の問題が出され、見田さんの方から「欲望の構造の変革」という問題が出されましたが、このこともこの会合にとってこれからの重要なテーマになるに違いありません。

「先祖の代のことまで問題にされるような地域社会のしがらみ」もつけ加わっていたことでしょう。これらの困難にとり組み、試行錯誤をくり返しながら現在の東山産業に脱皮してきたそうです。

「一七、八才のころから、学歴の不平等やらさまざまな社会の矛盾にぶつかりまして、何とか共同体のようなものをつくらうと思っていました。十年の軍隊生活の中では何も勉強しなかったのですが、やれば必ずできる。できないということはやらなからだ」という信念めいたものを得ました。

昭和32年ころ、農業共同化、近代化という当時の社会状況もあって、地元部落28戸のうち24戸の参画をねらって、ブドウ園から稲作に至るまでの共同化をめざして出発したところ、二、三年すると、分配とか能力の差とかいう問題が出てきてゆきまってきたわけです。当時、山岸会の拡大を熱心にやっていた人がいて、そんな問題は特講うけたら解決がつくというので、山岸会にお世話になったりもしました。それがきっかけで鶏とのつき合いがはじまりました。

三六年になりました。今度は4戸で鶏だけの部分協業を始めました。人間関係のふれ合いのテストとしてやってみたわけですが、どうやらそこで人間のつながりの妙味いいますか楽しさいいもんに触れたように思います。

三九年だったと思いますが、今度は7戸で土地も資金も投げ出している共同体に踏み切りました。食事も一緒だし、経済的にも繁栄しておつたし、はたから見たらみんな明るい顔しておるし、どここといって不満なところもなかったのです。そのころ東山を訪れた人も、東山が暗いとか、うまくいってないとかいって印象は受けなかったと思うんです。しかし、どうももうひとつすっきりせん。家族まで入

れての総参加者は三四五名。子供にとつては共同炊事、共同生活はたしかに天国やつたと思えます。しかし実にはちよつとしたこと、たとえばかけ口、表面での話とは違つた家族のうちわでの話など、人と人との関係は割切れんものが残つておつたのです。毎晩、毎晩みんで議論しおつたです。夜話して別れる時は、みなよかつた、よかつたというて笑顔で別れよるんですけど、翌朝どうも暗い。聞いてみると前の晩奥さんに一言いわれておる。そんなこと、とふつ切つたつもりでおるんですが、注ぎこまれた毒みたいに男もどうもすつきりしない。他ではどうか知りませんが、東山の場合はまったく女の人にかかつておつたわけです。この問題さえ片付いたら実は男はあまり問題ないといえるんです。

三年半というもの、とにかく毎晩、無我執無我執ということで討論しつづけてました。しかし、どうも親類の者は共同風呂、共同食堂というと来にくくなるんですね。法事ひとつとつてもひとつ財布でやっていると均一化するようになり、地元の縁者ともつきあいが薄くなる。これでは拡大の理想に燃えながら、ほかと違う特別な村に終つてしまふ。近いものつつながりが切れてしまふようでは、どう

して外とつながっていくかという危険がでてきた。これは大変だぞと思ひました。

そこでみつちり考えまして、共同炊事をやめようやないかいうことになりました。ひとつ財布もやめて、貯金通帳に給料がおちる形、しかし使いたい時にはいつでも引き出せるし、預金額以上にも借りることができると、まあ今こんな形でやっております。これでいかなかったら、いろいろいじくりまわしてみようやないかいうことです。これには子供は全部反対、女性は半分賛成、男性は全員賛成という結果が出りました。

私も実は一燈園や山岸会、新しき村でやっているような共同炊事、共同保育が共同体なんだという思いこみがあったわけです。共同体とは実はそれっぽつちのことではなかったのです。外わくはそれ程重要でないことがわかってきた。共同炊事やっておるから、一つ財布でやっておるから共同体だとは言えない。それより「お早う」明るくあいさつする中にすでに共同体が現われておる。もっと一般的に言つて人と人のかかわりが形はどうあれ、共同体といえる気がしておるのです。お互い大切にしようこと、愛情いうか、人間関係いうか、そうしたところがあるところ

すでに共同体なんだろうと思っております。

東山は仲々やる。だが子供の代にはだめだろう。こう言われておったのですが、13人の子供が全員残るといいだしてあります。決して共同炊事やないのです。生きがいいうか、何かそんなもんでやっていくのです。

今のところ一応の目標として、働き手百人、総家族数二百〜三百をめどにしております。

そして幼稚園とか共同炊事もすぐそのこととしてあります。共同炊事といっても、食べたいものが食べられるというところまでいかんと本物でないと思うんです。先の話に出た欲望の制卸いうことを考えますが、どうも我われ煩惱人にはうまくいかなかったです。無公害の刺身も食べたいし、酒も飲みたい。それより欲望をおおいに伸ばす形で欲望にとらわれることなく、すっきりした白紙の共同体、何もない共同体としてさかんにやっていきたいと思っております。」

志渡さんの「どろろくさい」話にみんな熱心に聞き入っていました。

二日目の夜に志渡さんが話したあと、新しき村のはからいで懇親会がもおされ、村の住人たちも多勢入り混じってあちこちにピー

ルをくみ交わしながらの小さな話し合いの輪ができました。特に村の若者たち、東山の藤井君、もぐらの二人をはじめ若い者たちは他の人たちが寝たあとにも別に集まり、ソフトボ

これからの展望

「無限大の拡大をめざす」と志渡さんは言います。それには具体的にどうしていくのか？ 山根さんがその問題について、今までのアメリカ、イスラエルの共同体の研究から分析してくれました。

「過去のアメリカの共同体の場合、外部に向かつての閉鎖性、それに内部の次の世代の離反にあつて一代だけで先細りになった例が多い。また横のつながりを欠いているためにまったく孤立化していった。成功した例、あるいはプーバーの言うように、失敗しなかった例としてはキブツがある。そこでは共同体の存続に欠かせない次の世代の育成——教育——に多大の関心を払っている。とともに、外部から常に新しいメンバーが入ってこれるようにしている。一説ではひとつのキブツが

ールの試合やら、新しいミニコミのプランを検討したりして、夜の更けるのも忘れて活気に満ちた話が展開しました。

できるまでに、その二倍から三倍の人の出入りがあつたと言われている。存続に欠かせない共同体間の横のつながりについては、キブツは連合組織に属していて、各連合はキブツ社会への「良心」——超エゴ——とでもいう働きをしている。物質的にも新しいキブツへのテコ入れなどしてキブツの存続においてつくしている。また一方、購売・消費組合、労働組合、地域連合などのネットワークを通じて、キブツは緊密な横のつながりを保っていて、文化的、経済的發展もそれらキブツの同志的連帯によるところが大きい。日本でもそのような連合が必要な時期が来ているのではないか。」

この指摘に対して渡辺さんは、「自然とそうなるものなら問題はないが、上からの連合

に自由を奪われるようなものだったらまずいと思います」と指摘しました。志渡さんは、「もう私は原川さん、渡辺さんなどと実質的にはもう連合していると思うんです。形はどうあれそれだけの重さの関係ができていますから」と言う。手塚さんからも、「夜一緒にやすんだ志渡さん、渡辺さん、岡崎さんが、経営について、養鶏法について腹藏なく話して、かかさず養鶏の技術を交換しあっているのをそばで寝ながら聞いていて、それだけでも話合いの会の意義はあつたと感じました。経営とか技術交流のような研究会のようなものができて面白いのではないのでしょうか」という意見も出されました。

縫田さんからも具体的提案として、「自分は渋谷の自然食品店で時々買うのだが、たいへんに繁盛している。もしここに集まった共同体が無農薬、無化学肥料の自然食品を共同体の名前を明記して発売したら、本来口コミで伝わる自然食品の評判だから売れること間違いなはずです。消費者としても大いに助かります」と出された。それが実現したら、盛り上がりつつある消費者運動と提携しながら共同体の真価を発揮できる場になることでしよう。

話題は自然のなりゆきで、これからの共同

体を背負ってゆく青年たちのことになり、どこでも次代をになう人間の養成には気を使っています。山岸会の特講、研鑽方式は大きな力であり、新しい人材を共同体社会に含みこんでゆくのに大きな役割を果たしています。厚木振出塾も多くの人間が通過しながら、そのうちの幾人かは着実に新しい共同体のあり方について模索しているようです。一燈園は全国に散っている「光友」を通じて、また新しき村は「村外会員」などを通じて、それぞれ独特の運動を着実にすすめています。東山産業は、誰でも枠なしに研修生として受け入れるといっています。こうして、各共同体を中心にして次代をになう青年たちの層が少しづつ厚くなっているようです。

人数の多いことも無難なことではあります。当面の問題は多人数の核となれるような人間を十分に伸ばし、持ち味に従って成長させることが急務のようです。たとえば、もぐらにはリーダーがいらないといえます。現場仕事もみんな持ち回りで監督の役目をす。話し合いの司会も同様です。こうしてみんながリーダーになれる能力を身につけてゆくのでしよう。

「今の共同体運動の中でリーダーの存在、あるいは権力的な存在は必要か」との山根さんの間に、大俣の飯河さんは「権力を持ちた

がらないリーダーとでもいうものがどうしても必要になるらしい」ことを大俣の法主さんの例をひいて説明してくれました。志渡さんの意見では「絶対に必要かどうかは知らないが、リーダー的な人格として大局と小局をわきまえた人物は今のところ不可欠らしい。つまり人と人の対立などを待たず解決することが多いことをわきまえて、同時に他人に対して細やかな心使いを知るといったようなことが、リーダーの人格の必須条件だと思う」とのことです。

今回の会合は、これまで以上に参加者の輪が広がり、さらに参加者同士の交流も深まってきたようです。目に見えないところで、お互いの地下水と地下水とがつながり合って、大きな豊かな流れをつくりつつあるように感じられます。さらに、各共同体からの参加者たちが、たえずよりよい社会と生活を求めて努力している姿には肉体的年令をこえて本当の「若々しさ」を感じざるをえません。こうした「若者たち」が、明日の共同体社会の基礎づくりをしている姿には、何かしらさわやかな神々しささえ感じるほどです。

今回の会合は、桜の花の咲く頃、奈良の大倭紫陽花邑で行なわれることになり、再会を約しつつそれぞれの場所に帰って行きました。